

平成 19 年度 語学教育研究所 研究発表会要旨

“王冕死了父親”の生成について —認知言語学的なみかたと生成文法的なみかた—

山口 直人

中国語で自動詞の“死”は本来一項動詞であるが、“王冕死了父親”という文においては、“王冕”と“父親”という二つの項を取っている。事情は日本語でも同様で、上例の日本語訳〈王冕は父親に死なれた〉はいわゆる「迷惑の受身」であるが、ここでも二つの項が現れている。こうした日中両語に観察される、本来一項動詞であるものが二つの項を取る現象は、当然のことながら何らかの共通点がある。

中国語において、この“王冕死了父親”タイプの文がいかんして生成されるのかという問題については、これまで様々に論じられてきた。特に 80 年代以降、生成文法の「GB 理論」の枠組みで、「非対格性の仮説」と「移動」の概念にもとづく分析が一定の成果を挙げている。ところが沈家煊 2006 は従来の生成文法の分析を批判する形で、認知言語学の立場から“揉合”(blending) という概念にもとづく新提案を行った。

今回の発表では、(1)沈 2006 の生成文法批判には誤解があること、(2)「非対格性の仮説」と「移動」の概念にもとづく生成文法の考え方は、“王冕死了父親”タイプの文の生成を考える上で依然として有効であり、特に「遊離数量詞」の現象から、その有効性に対して経験的な証拠が得られること、以上 2 点を主張した。